女子校生に潰されたい

巨根痴漢男を女子校生たちが
寄ってたかってキ〇タマ責めのうえ、
文化祭で玉責めショーに出す！

玉子王子　著

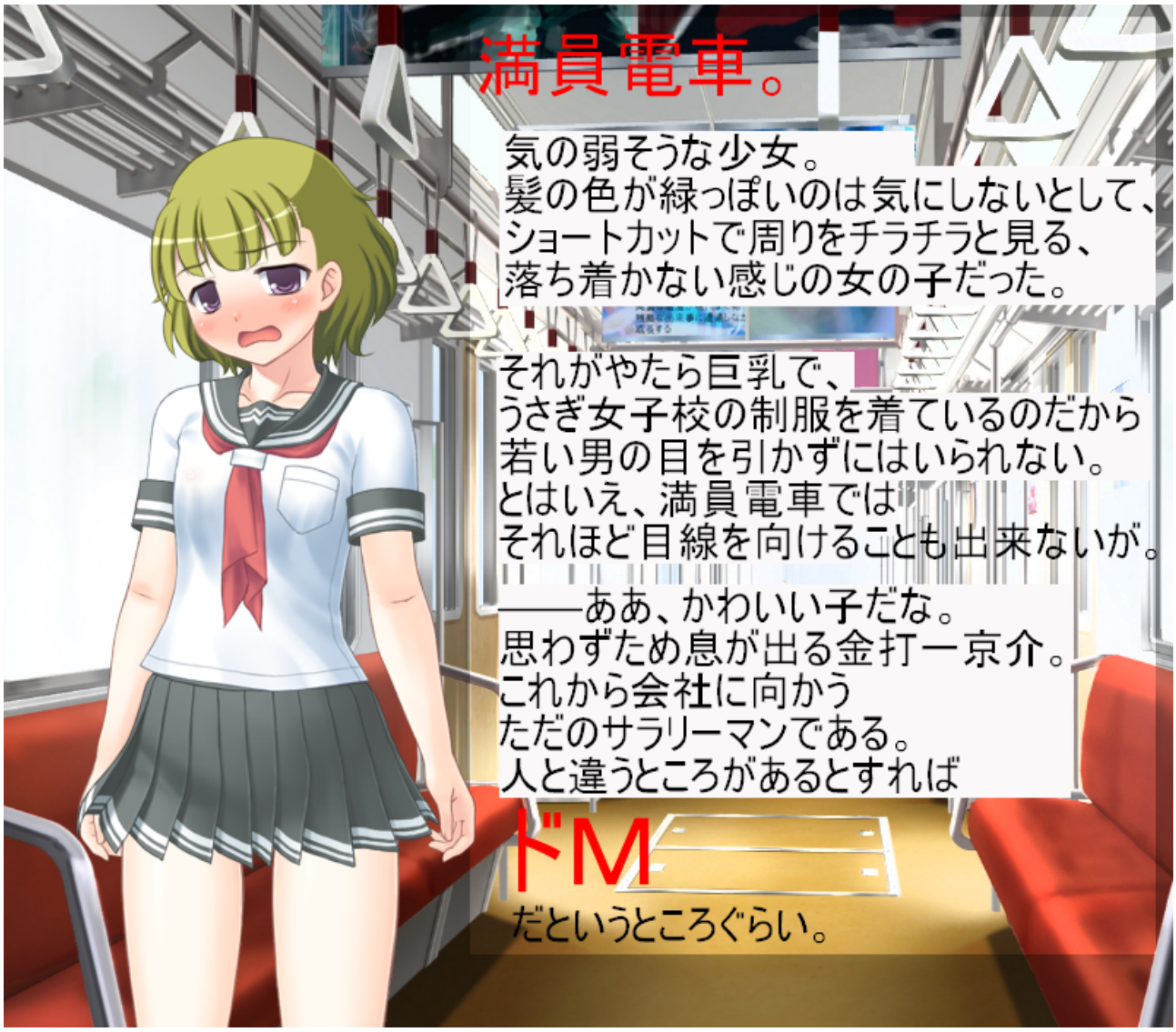
1章　短小痴漢の金責めが巨根ドMの夢開く

満員電車。

気の弱そうな少女。

髪の色が緑っぽいのは気にしないとして、ショートカットで周りをチラチラと見る、落ち着かない感じの女の子だった。

それがやたら巨乳で、うさぎ女子校の制服を着ているのだから若い男の目を引かずにはいられない。



とはいえ、満員電車ではそれほど目線を向けることも出来ないが。

――ああ、かわいい子だな。

思わずため息が出る金打一京介。

これから会社に向かうただのサラリーマンである。

人と違うところがあるとすればドMだというところぐらい。

お気に入りのシチュエーションは、女子校生に寄ってたかって睾丸を潰されるというもの。もちろんしっかり制服を着ていてもらう。普通の恰好ではただの若い女だ。

あくまで「女子校生」でなければならない。

――あの子にキ〇タマ潰してもらったらどんなにいいか……

しかし、とてもそんなことをするタイプには見えない。

今の時代は、ナノテクノロジーが発展し、睾丸ぐらい潰れても一瞬で再生させることが出来る。

だがだからといって、易々潰してくれる女などまずいない。

それは、世界的に見てもドS女性が多いといわれるうさぎ県であっても例外ではない。

気弱巨乳少女、白浜黒子はまったくドSどころか、Sですらない。

しかし、経験は豊富だった。

睾丸潰しの経験が。

後ろに男が立つ。

す、と手の甲で尻を撫でる。

ビク、と震える白浜。

チラ、と後ろを見るが、手の甲ならセーフか、事故か。

腹が立つが、事故かもしれない、というような考えではないらしいことが顔で分かった。

仮に故意でも、騒いで争いになるより自分が我慢した方がいい。

そんな風に考える気の弱い少女なのだ。

ちょうど、人ごみに押されて友人とも離れているのが災いした。

見た目どおり気の弱い少女なのだ。

それを、痴漢男は確信する。

しばらく手の甲で触ってから、大胆にそれを翻し、掌で形のいい尻を撫でる。

「ひっ」

思わず声を出す白浜。

最早偶然ではないし、文句を言われる前にやめようという分別は相手の男にはないようだ。

――このまま泣き寝入りかな。かわいいが、これはとても金潰ししてくれるタイプじゃないな。

助ける気などまるでない金打一。

痴漢男は体格もよく、ひょろひょろの金打一にはとてもかないそうにない。

周りの人間は、その男から目をそらしていた。

痴漢ではないかと気づきつつも、弱そうな男が冤罪を掛けられていれば燃え上がる正義感も、強そうな相手には燃え上がらないようだった。

「や、やめてください」

金打一は、気の弱そうな少女が声を挙げたのに驚く。

痴漢も一瞬面食らうが、すぐに頬を緩める。

「へへへ、何のことだよ？」

「触ってるでしょ？」

「さあ……気のせいだろ。そっちが近付いてきたから手が当たっただけだ、盗人猛々しいな。なあ、あんたら俺が痴漢してるの見たか！？」

急に叫ぶ男。

周りを見回す。

と、シャツから二の腕が見える。刺青がチラチラと見える。

それが脅しになると思ってやっている。

まさに外道というしかない。

――クズが、死で償え。

目を反らしつつ、**心の中で叫ぶ**金打一。

周りも、似たようなものだった。

「へへへ、そういうこ……うっ！」

バン、と顔を叩かれる男。

平手で両目を被うように叩かれる。目打ちという目潰し技。

別に怪我もしていないが、一瞬視界を奪われる男。

「ぐ、この……おぐあっ！」

ゴリ、と横にいても音が聞こえるほどの勢いで女子校生の膝が男の股間を持ち上げる。

ズボンの中で、ゴチャ、と嫌な音を立てて肉袋がひしゃげ、中の肉玉の片方が運悪く潰れる。

「おごおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！」

股間を押さえ、膝をつく男。

と、その髪の毛を掴み、ゴチャ、と顔面に膝を叩き込む少女。

「あぎいいいいいい！」

顔を抑えようとするが、股間が痛すぎて手が動かない男。二度三度、顔面膝蹴りの少女。

顎や鼻に膝を叩き込む少女。

転がる男。

騒ぎを聞きつけ、人ごみを掻き分けてくる同じうさぎ女子校の生徒。

「クロコどうしたの！？」

「この人痴漢なの」

「じゃあ金潰ししかないね！」

いくら一瞬で玉が治る時代とはいえ、痴漢＝金潰しは無茶ではないだろうか。

と、思う間もなく周りから声が挙がる。

女性たちだ。

「いいわよ！　大事なキ〇タマ潰してやりなよ！」

「痴漢野郎には当然の報いよ！　**睾丸処刑**ぐらいね！」

「タマタマなんてすぐ治るんだから、何回か潰して思い知らせてあげなよ、薬はここにあるからさ！」

「あ、私も持ってるわ」

「私も」

「私も」

「私も」

手を挙げる女たち。OLや主婦、同じような女子校生。

ナノマシン入りのカプセルはナノ薬と呼ばれ、前は医者に貰わねばならなかったが、最近では自動販売機でも買える。

だから多くの人間が持っていても不思議ではないが、これから玉潰しという場面で女たちがそれを治療する薬を大量に持っている状況は多くの男たちを縮み上がらせるに十分だった。

――こいつら、玉潰し用に薬常備してんのか？

そんなわけがないと思いつつも、唾を飲まずにはいられないドM男の金打一。

股間が反応しそうになるが、何とか理性で押さえる。

勢い良く女たちが出てきたので、痴漢男は白浜やその友人を含む女たちに取り囲まれる形になっていた。

「お、お前らなんだよ、関係ないだろ！」

「あるわよ、この腐れキ〇タマ！」

「威勢いいわねえ、その様子じゃ、多分片金潰れてるでしょ？」

「薬でタマタマ治しても痛みや衝撃はそのままだから、もうまともに動けないよ？」

「お、お前ら、何する気だ」

「あ、ビビってるビビってる！」

「チ〇ポ縮み上がってるわよこいつ！」

「見てあげましょうよ！」

「いいわね！」

「どういうことだよ！？　だ、誰か助けてくれ！」

痴漢をやり、嘘をついて被害者のせいにして誤魔化そうとして、さらに脅して周りを黙らせようとした。

そんな男を助ける人間などいるわけがない。

殺されたり再起不能になるというならまだしも、薬一つで治る状況から誰が助けるだろう。

ただ、怪我は一瞬で治るが、痛みや衝撃はなくならない。

だから決して楽な状況ではないが、かといって取り返しがつかないようなことはまったくない。

大体、まだ大した状況ではない。

周りの女たちが群がる。

ある意味……いや、ドMの金打一にはある意味もクソもなくうらやましい状況。

腕を掴んだり、服を引っ張る。

「オラ！　チ〇ポ見せなさい！」

「縮んでんでしょ！」

転がっている男、見あげる形なので短いスカートからパンツが見えたりもするが、喜べる状況ではなかった。

「や、やめて……あっ！」

ズボンが宙を舞う。

ついで、パンツだ。

玉を押さえる形のまま、股間を押さえ込む男。

だが、腕を持つ力をさらに強められ、無理矢理引き剥がされる。

　それでも何とか足を閉じて股間を隠そうとする。
　嘲笑する女たち。
「こいつ必死ねえ！」
「よっぽどチ〇ポ小さいのね！」
　別に大きくても無理矢理見ようとする女たちに「どうだ」ということにはならない気がする。
　巨乳だから見せたがる、というわけではないのと同じだ。
　だがまあ、この痴漢の男性器は極小ではあった。
　足を捕まれ、大の字に引っ張られる。
　丸出しの生殖器に女たちの目が集まる。
　爛々と輝く女たち目は、多くの男を見てきた経験豊富な目だ。
　それに映った一物は、極小だった。
　それは、小指というにはあまりにも小さすぎた。
　一瞬の沈黙の後、爆笑する女たち。
「ぎゃはははは！　何このチ〇ポ！」
「片金潰れてるからって、これはないわよ！」
「先っぽの大きさから本来の大きさ推測できないわ！　唐辛子みたいだもん！　超包茎チ〇ポ！」
「短小痴漢、金責めリンチと」
「ひいいい、もう許してくれ！」
　羞恥で真っ赤になり、震える痴漢。
　しかし、女たちはまったく許さないところか、むしろその反応に喜色さえ浮かべる。
「だめよ！　とりあえず電気あんま！」
「やっちゃいなさい、押さえとくから！」
「やだあああああああああああ！　一個だけは残して！」
「治るんだから同じでしょうが！　何で男ってこう非合理なのかな？」
「玉潰されるときはいっつもこうなのよね、玉だけは許して、片金だけは残して、って！」
「そりゃ玉が治らないなら分かるけど、一瞬で治るのよ？　いつもいつも、潰されるときにはキ〇タマ乞いして……本当に……楽しいったらないわ！」
「そうよね！　必死でキ〇タマ守ろうとしてもらってこそ、潰す楽しみがあるのよね！」
　短小痴漢に脅されて何もいえなかったのが嘘のような女たち。
　というか、何か考えがあったのかもとさえ思えてくる金打一。
　両手両足を押さえられ、下半身丸出しで無防備に男性器をさらされている痴漢。
　ガタンゴトンと電車が走る音が他人事のように響いていた。
　グニュ、と極小の男の部分を女子校生が踏みつける。
　不思議と、靴を脱いで。
「うわ、いつ踏んでも金袋はグニャグニャして気持ち悪いわ。縮み上がって硬そうなのに、不思議ね。まあ硬いといえば硬いけど、ゴムボールぐらいの硬さかな」
「靴はいてればいいんじゃない？」

「靴でキ〇タマ踏み潰しは可哀想だから。あなたも嫌でしょ？　靴なんて」

「裸足でも十分嫌……おぎゃあああああああああああああああああああ！」

「残った左玉潰す残った左玉潰す残った左玉潰す」

　ゴチャ、と踏みつけ、グリグリと睾丸を踏みにじり、足を挙げてまた踏み潰す。

　それを延々機械のように繰り返す女子校生。

「マヤ甘いぞ甘いぞ、もっと思い切り来いってこの人も思ってるよ」

「いったなクロコ！　なら遠慮なく踏み潰してやる！　自業自得だよ！」

「おいそれのどこが自業自得……あああああああああああああああああああああああ！」

　白浜の台詞によって、睾丸を踏み潰される痴漢。

　二個玉粉砕により、泡を吹いて気絶する。

　すでに潰れていた右玉が一緒くたに踏みにじられたダメージも相当あったようだ。

　当然のように、誰かがナノ薬を口に押し込む。

　縮んだ金袋に指を減り込ませるOLらしい女。

「タマタマ再生したわよ」

「オラ、起きろ！」

　ビンタを食らい、ビクッと震えて目を覚ます痴漢。

「や、やめ……もう十分……あっ」

「小さいのはチ〇ポだけにしときなよ。女の敵は、この場の女全員に一回ずつ去勢される運命なのよ！」

「い、いやだあああああああああああああああ！　キ〇タマだけは！」

「もう潰されてんのよ！　一回！」

　この車両の女性たちは十人二十人ではまったくきかないだろう。

　――キ〇タマ四十個も潰してもらえるのか。

　うらやましい。

　一緒に潰してもらうのは簡単だろう。

　飛び出して痴漢を擁護し、このぐらいで怒るな、などといってその辺のドS女性の乳でも揉めば一緒に押さえ込まれて**玉潰しパーティー**に参加できる。

　だが、それはもったいない。

　見ると、女たちの多くは出勤前のOLや買い物に行くのかなんなのか、主婦たちだ。

　それでも平均して三十ぐらいだが、女子校生ならば平均して十代なのだ。

　平均、というほど年のばらつきはないが。

　――ここで痴漢の一味としてタイーホはもったいない。折角夢を叶えるチケットを手に入れたんだ……女子校生が二人しかないこの場で使うのは惜しすぎる。

　女子校生に睾丸を潰されるという夢、妄想。

　叶える道などないと思ってきたが、今急に目の前に開かれた。

　ちょっと痴漢をすれば、それで夢が叶うことを知った。

　女子校生が大量にいる場所で痴漢すればいいのだ。

　金潰ししてくれそうなら留まり、ただ警察に突き出されそうなら逃げる。

まあ、うさぎ県の女性なら、心配はないだろうと金打一は思う。

最悪、警察に捕まってもうさぎ県の警察は婦警だけであり、性犯罪者に金責め制裁をするという噂が絶えない**期待できる相手**ではある。

が、やはり若い方がいい。

というか、「女子校生」がいいのだ。

金打一は、そういう趣味なのである。

と、考えているうちに、いつの間にか周りに女が増えていた。

他の車両から呼ばれて集まってきていたようだ。

そうする間にも、短小痴漢が金潰しを食らっていく。

俗に言う「金弛緩剤」で陰嚢を弛まされ、握り潰すも蹴り潰すも女たちの思うがままにされていた。

ナノ薬ならまだ怪我の治療用に持っていたといえるだろうが、金弛緩剤となるともう金責めリンチのために常備していたとしか考えられないが、誰も何もいわない。

「ほらよく見て！　あたなの！　こ！　う！　が！　ん！　潰されてるわよ！」

「ほーら、さっきの握り潰し画像よー。あなたが男じゃなくなる決定的瞬間」

「そのときの顔がこれってわけ、みなよほら！」

スマホを顔の前に示され、無理矢理瞼を開けさせられて自分の去勢画像を見せ付けられる痴漢。

気づくと、痴漢以外には金打一しかその車両には男がいなくなっていた。

「あら、この人残るんだ」

「金責め大好きのドMとか？」

「なんなら一緒に潰される？」

「え、マジで……」

「馬鹿ね！　風俗じゃないんだから！　潰されたがる奴潰しても仕方ないでしょ！」

「そう？　私はキ〇タマがあって、潰していいならそれで幸せだけど」

「必死で防ぐのを無理矢理潰すのがいいのよ」

「うーん、そういうもんか」

「……」

一瞬、逮捕などのペナルティー無しでただ潰してもらえるかも、と期待した金打一だったが、どうもそういう流れにはなりそうにない。

やはり潰してもらうには「痴漢」という**肩書き**がいるようだ。

そしてそれを持てば、金責めリンチの後には逮捕が待っている。一回しか使えない。

いや、刑期を終えてまたやればいいのだが、かなり時間が空いてしまう。

なら、この場ではやはりあきらめるしかない。

うなだれて、車両を後にする。

――いいなあ、金責めハーレム。

「ぎゃあああああああああああああああああああ！　もう殺してくれえええええええええ！」

「殺すわよ。……キ〇タマをねっ！」

「まさにドS！」

「きゃははは！　キ〇タマここ？　ここ？　靴だから良く分からないわねえ」

「や、やめ、やめ……おぎゃあああああああああ！」

「いい反応！　片金いったわね！」

「すぐもう片方も潰してあげるからね！」

「片金だけは残してくれえええええ！」

隣の車両に移る金打一と、援軍の女がすれ違う。

三十ちょいの主婦っぽい女たち。

「楽しそうじゃない」

「違うわよ！　痴漢は許せないから、お仕置きするの！」

「あ、そうだったわね！　そういう**歴史認識**で金責めリンチ楽しみましょう！」

ゲラゲラ笑いながら参戦していくドS女性たち。

女子校生でなくとも金責めをお願いしたくなる金打一だが、ぐっとこらえる。

――いいんだ、俺は女子校生狙いだから。

思いつつ、金責め車両への扉をガシャンと閉める。

体験版終わり

この後、ドM男は夢を叶え、さらにその向こう側に向かいます。
といっても、どちらも玉潰しとナノテクによる玉再生の繰り返しのキ〇タマリンチですが。
ついでに、主人公の巨根を女子校生たちがかなり褒めてくれます、ただ、本番どころか脱ぐこともありません。
金責め・CFNM・巨根褒め、あとちょっとだけ手コキしてくれるという感じの話になります。

続きは製品版でお楽しみ下さい